

一、『哀しい七不思議』

0

「罪。罪の対義語は、何だろう。これは、難しいぞ」

「ったく、お前、太宰かぶれか？ 一応答えてやるよ、法律さ」

頭を掻き、青年は答えを紡ぐ。

個室であるこの病室にいるのは二人だけ。
ベッドに座る、淡い栗色の髪の少女と、パイプ椅子に腰掛ける、鉾付き革ジャンを羽織り、片眼鏡の奇妙な青年だけ。

季節は暦の上では春。

だというのに、外は冬のように寒く、雪がちらほらと舞い、この個室でも暖房が温風を送っていた。

「罪ってのは、君、そんなものじゃあないだろう」

「いつまで続ける気だよ。しつかたねえな それじゃあ、なんだい、神か？ お前はどこかヤソ坊主くさいところがあるからな。いや味だぜ」

無論、この部屋には本など一冊もない。だが、二人の罪人は本に書かれた台詞をよどみなく紡ぐ。

何かを、確認するかのように。

一人の罪人は、数え切れないほどの罪を犯した。

一人の罪人は、これから数え切れないほどの罪を犯す。

「まあそんなに、軽く片づけるなよ。もう少し、二人で考えて見よう。これはでも、面白いテーマじゃないか。このテーマに対する答え一つで、そのひとの全部がわかるような気がするのだ」

「もうやめようぜ。疲れた。いや、嘘。分かった、やるよ。えーと まさか・・・

・・罪のアントは、善さ。善良なる市民。つまり、おれみたいなものさ」

台詞だというのに、青年は急に恥ずかしくなる。

善良なんて言葉ほど、自分に遠いモノはないことを知っているから。

「冗談は、よそつよ。しかし、善は悪のアントだ。罪のアントではない」

「悪と罪とは違うのかい？」

「違う、と思う。善悪の概念は人間が作ったものだ。人間が勝手に作った道德の言葉だ」

「うるせえなあ。それじゃ、やっぱり、神だろう。神、神。なんでも、神にして置けば間違いない。腹がへったなあ」

最後の言葉は本心からだった。

時刻はそろそろ午後二時。

昼飯を抜いて、このわがまま姫に付き合っているのだ。腹の一つも減る。

「いま、したでヨシ子がそら豆を煮ている」

「ありがてえ。好物だ」

嘘。本当は煮豆なんか嫌いなのだが、腹が減ったら何でも美味しい。煮豆でもいいから食

いたい気分だ。

「君には、罪というものが、まるで興味ないらしいね」

「そりゃそうさ。お前のように、罪人ではないんだから。俺は道楽はしても、女を死なせたり、女から金を巻き上げたりなんかはしねえよ」

つくづく思うが、この葉蔵という男は最低だ。

まあ、今自分が演じている堀木も似たようなものだが。

「しかし、牢屋にいれられる事だけが罪じゃないんだ。罪のアントがわかれば、罪の実体もつかめるような気がするんだけど。．．．神．．．救い．．．愛．．．光．．．しかし、神にはサタンというアントがあるし、救いのアントは苦悩だろうし、愛には憎しみ、光りには闇というアントがあり、善には悪、罪と悔い、罪と告白、罪と．．．ああ、みんな同義語だ、罪の対語は何だ」

「ツミの対語は、ミツさ。蜜の如く甘しだ。腹が減ったなあ。何か食うものを持って来いよ」

ああ、後で食堂にでも行こう。お世辞にも美味しいとは言えないが、贅沢を言っては駄目だ。

「君が持ってきたらいいじゃないか！」

気のせいかな、言葉が刺々しい。

いや、気のせいだろう。

多分。

「なあ、お前はどう思うんだ？」

台詞を中断し、言った。

「ん？ 何が？」

「これじゃあ、葉蔵はドストエフスキーの罪と罰から、その二つはもしかすると同義語じゃなくて対義語なのかもしれないって思うだろう？だが、それが正解とは書かれてない。だからさ、これは読者も一緒に考える問題じゃないか、って思ってた」

「アントはどう思ってるのよ？」

「ん？ 俺か？ 俺は堀木の『ミツ』かな。ああいう言葉遊び好きだし」

「ふうん」

呟き、窓の方へと目をやる。

外は音もなく、ただしんと雪が降るのみ。

「多分、罪にはアントはないよ」

寂しげな瞳で、少女は呟く。

「だって、罪ってのは一人で償うものでしょ？だから、ずっと一人ぼっち．．．」

「哀しいな」

「でも、事実でしょ？」

「そうかね。俺はそう思わないな」

「何で？」

「罪ってのは重たいモノだろう？そういう重たいモノは二人で担いだ方が運びやすい」

「ばーか。心にもないことを。この嘔吐き」

「気付いたか？俺は嘔吐きなんだよ」

言って、青年は笑う。
少女も、笑った。

1

けたたましく電話のベルが鳴る。

それも、今時の電子音でなく四半世紀前の黒電話なので余計に五月蠅い。

二十一世紀になってもう数年経つというのに、黒電話とはなんと時代錯誤なことであるか。

電話のベルに反応し、男は呻きながら、事務机の下から這い出てくる。

年は二十ほど。乱雑に染めた金髪が寝癖であちこち跳ねている。

どうやら起き抜けらしいが、普通、そんなところで睡眠をとる者はいない。

男は乱雑に頭を掻きむしり、ジリジリ五月蠅い受話器に手を伸ばす。

「もしもし？」

『おっそーい！いつまで待たせるのよ、狼!!』

「仕方ないだろ。今起きたばっかんだから。何だよ、零那。何か用か？」

男　狼は、先ほどの電話のベルの十倍ほどの音量に顔をしかめながら、電話の主に尋ねた。

『仕事よ、仕事。今依頼主と一緒にいるの。あと数分でそっち行くから部屋片付けておいてよ』

「はい？またお前、勝手に仕事引き受けたのか？」

『いいでしょ。この一週間、全く依頼なかったんだから』

「まあ、いいけどよ。こちらら、何でも屋じゃねえんだ。また浮気調査とかだったら速効で断るぜ？」

『ご心配なく。完全無欠にこちら側の事件よ。じゃあね』

言っや、電話が唐突に切れる。

「あゝ」

狼は頭をボリボリと掻きながら、受話器を元の位置に戻す。

そして、書籍やプリントが乱雑に積み重ねられている机の中で、例外的に秩序のある区域に置かれている小さな木箱を手にとった。

中に収められていたのは、ルーペのレンズのようなガラス製の物体。

それを右目につけ、狼は回転椅子の背もたれに掛けてある、今時珍しい鉾のついた黒い革ジャンを羽織った。

ボサボサだった金髪に染めた髪を手櫛で後ろに掻き上げ、事務机の隣の小さな机に置かれたデスクトップパソコンのキーボードに無造作に載せられた死神の鎌を連想させるシルバー・ネックレスを首にぶら下げる。

「さて、今度のはどんな依頼なのかねえ」

狼はあくびをかみ殺し、朝食になるものを探すため、冷蔵庫のある台所へと向かう。

時刻はもうすぐ午後三時になるうとしていた。

依頼主は女子高生だった。

紺色のブレザーに、赤いネクタイ。ブレザーには彼女の通っている高校の物と思われる校章が着けられていた。

接客用のソファアーにきちんと足を揃え、その上に手を載せ行儀良く腰を掛けている。今時珍しく、髪を染めず、化粧も精々唇にリップを引いた程度の温和おとなしそうな少女だった。

いや、温和しそうというよりは怯えた感じだ。
目の前の狼に。

・・・明らかに狼の視線を避けている。

「えゝ・・・あ・・・黙ってるとき、分かんないんだけど」

狼にもそれがひしひしと伝わってくるのか、苦笑いを浮かべ、少女に尋ねる。

「つかさ、アンタのその時代遅れなヤンキーっぽいカッコが彼女を怯えさせてるんじゃない。着替えなさい。今すぐに」

今まで自分の茶色いツインテールを手でいじっていた零那が口を開く。

「うるせーな。これはポリシーなんだよ。あゝでも、怖かったら脱ぐけど。えゝと・・・」

「どうやら、依頼主の名前を忘れたらしい。」

「栗木 亜美あみです。あ、気にしないでください。ただ・・・その・・・えゝと・・・」

狼が書類に手を伸ばすより先に、依頼主 栗木 亜美が言った。

視線は狼の右目へと向いている。

いや、違う。

狼の右目につけられたレンズへと視線は注がれていた。

「ああ。コレか？もしかして片眼鏡を見るの初めて？」

狼は片眼鏡をちよつといじりながら亜美に尋ねる。

その問いに、亜美は気まずそうにくくりと頷いた。

「そんなに珍しいかな、コレ」

「珍しいどころの騒ぎじゃないわよ。つか、その服装で片眼鏡は似合わなすぎなのよ。外しなさい。どうせ、伊達でしょ」

容赦なく、零那はツツコミを入れる。

「これはダメなんだ。とれない」

「なんでよ？ 何か思い入れがあるわけ？」

「実は死んでしまった義理の妹の形見なんだ」

「真面目な顔して嘔吐くな。つか何なのよ？ その『即興で創りました』みたいなギャルゲーみたいな設定は」

「ん？ ああ。亮りょうの貸してくれたゲームのキャラの一人の設定のパクリ」

「んなもんやってたの。どーりで深夜までアンタの部屋明けりついてたわけね」

「ちなみにハッキン」

「近寄るな変態」

氷のように冷たい鋭い声で零那は言い放つ。

「あの〴〵そろそろ本題に入って良いでしょうか……？」

申し訳なさそうに亜美が声を上げる。

「あっ……ああ。ごめんね。話して」

「はい……でも、信じてくれるかどうか……」

「大丈夫だよ、亜美ちゃん。ここは探偵事務所じゃない。魔術師の巣は、そっち側の事

件専門の請負稼業だから安心して話していいよ」

「はい……では」

亜美は少し間を置き、ぽつりぽつりと語り出した。

きっかけは一人の生徒の自殺だった。

自殺した生徒の名は銚子ちようし旭あさひ。

クラスに一人はいる気弱な感じの生徒だった。

自殺の理由は不明。

理由は簡単。

遺書がない。

遺書もなく、自宅で首をつっていたそうだ。

遺書のない自殺。

よほど、この世に何も未練がないということか。

狼は面白くなさそうにため息を吐いた。

「……問題はそれからなんです」

亜美はうつむき、声のトーンを下げた。

そう。

自殺はきっかけに過ぎなかった。

すべての始まりの小さな火種に過ぎなかった。

「七不思議……っていうんでしょうか。必ず何処の学校にもあるアレです。それから一週間に一回必ず不思議なことがその七不思議に合わせて起こるんです。しかも、銚子君のことに関連するように」

始まりは自殺から五日後。

北校舎の階段が赤く染まっていた。

絵の具ではなく、

血。

その血で、名前が書かれていた。

銚子 旭、と。

それから一週間後。

今度は理科室。

理科室のホルマリン漬けに御札が。

『呪』の文字と共に、名前が書かれていた。

銚子 旭、と。

それから一週間後。

養護教諭が第一発見者だった。

保健室のベッドにナイフでズタズタにされた人体模型が寝かされていた。

人体模型の額には御札が。

『許さない』の文字と共に名前が。

銚子 旭、と。

それから一週間後。

校庭のトラックに赤いペンキで蹄が描かれていた。

よく見ると、その蹄一つ一つに名前が。

銚子 旭、と。

それから一週間後。

校庭の像の手に包丁が針金で強引に縛り付けられていた。

包丁は血まみれ。

血で文字が書かれていた。

銚子 旭、と。

それから一週間後。

四階の空き教室がペンキで真っ赤に染まっていた。

黒板は真っ二つに割れ、ロッカーはバットか何かで何度も叩いたのだろうか、無惨にも潰れていた。

割れた黒板には大きくペンキで名前が書かれていた。

銚子 旭、と。

残りはあと一つ。

全てを知った者に厄災が降りかかるという、

俗に言う呪いの一つ。

「悪戯じゃないの？ 呪いとかそういう類じゃないわね。絶対。もっとトリックとか使いなさいよ、やった奴。そんなの小学生でも出来るわ」

みたらし団子をばくつきながら、零那は尋ねる。

「はい。教師達はそう考えています。でも、質が悪すぎます。ただ七不思議に関連させて面白がってやってるならマシなんです、どうもそれだけじゃない気がするんです」

「と、言うത്？」

「親しかった者しか知らないことが、その悪戯の随所に折り込まれていたんです。例えば北校舎の血がばらまかれていた場所は生前、旭君が怪我した場所なんです。理科室は彼が科学部で常に出入りしていた場所です」

「つまり、その悪戯をやってる奴は銚子 旭の身内ってこと？」

零那は言いながら、みたらし団子を綺麗に平らげ、今度はポテトチップスの袋を破る。

「多分・・・そうだと思います」

「なあ」

「」

ずっと腕を組み、黙考していた狼が口を開く。

「君は、俺達にどうしてもらいたいんだ？ 悪いけど、こんな悪戯、自分で調査すれば簡単に犯人が割れる。身内ネタ故に犯人がばれやすいから、他の盗難事件なんかよりずっ

と楽だ。違うかい？」

狼の問いに、無言で亜美は頷く。

「こういう話、したくないけどさ。依頼料だって馬鹿にならない。こんなことにお金を使うより、もっと別のことに使えばいい。洋服とかにさ。それとも、何か理由が？」

「……………犯人は分かっているんです」

掠れた声で亜美は呟いた。

「梨木 薫^{なしき がある}。同じクラスで、銚子君の親友でした」

「へえ。で、どうしてそいつが犯人だと？」

「見てしまったんです……………彼が階段の仕掛けを作っているところを」

亜美は絞り出すように声を紡ぐ。

「彼は……………梨木君は、銚子君が自殺した理由を知っているんです」

「自殺した……………理由？」

「彼は……………強請^{ゆず}られていたんです。同学年の不良グループに。一年の時からですから、二年になって相当な金額になっているはずです。それを苦にして自殺。梨木君はそう考えているんです」

「よくある話だ」

狼はつまらなそうに呟いた。

「それで、復讐。七不思議に見立ててあたかも銚子 旭の呪いだと思わせる、か。つまねーことに時間掛けてるな、おい。青春の無駄遣いだぜ」

狼は頭の後ろで腕を組み、大きく伸びをした。

「それでさ、最初の質問に戻るけど、俺にどうしてほしいんだ？」

「彼を止めてほしいんです。彼はその不良グループの人達を七不思議の呪いに見立てて殺す気です。それをどうか」

「……………ただ、そいつを説得して止めてほしいんじゃないんです？」

「……………はい。この事件をあくまでも七不思議として解決してほしいんです。それが、依頼内容です」

「なるほど……………難しい依頼だ」

狼は人差し指で片眼鏡を押し上げ、狼は呟いた。

「ガキの説教と、隠蔽工作。どっちかっていうと、こういうのは亮の仕事なんだけどなあ……………」

ぼやきながら、頭を掻く。

「だが、確かにこの魔術師^{マジシャンズ・ネスト}の巢が引き受けた。交渉成立だ」

狼は立ち上がり、鉾のついた革ジャンを翻す。

「で、後はどうやって学校へ潜入するか、だが……………やっぱ夜中に忍び込むしかないな。あ〜でも、そうしたら、そのガキ呼び出さなきゃならないか……………めんどくせえな」

「別にそんなことしなくても平気よ」

ポテトチップスを食べ終わり、コンビ二のおにぎり（ツナマヨ）をぱくつきながら、零那が口を挟む。

「どうするんだ？」

「にひひひ。それは後でのお楽しみ〜」

雛菊高等学校は魔術師の巣がある新宿から離れた郊外にあった。

偏差値は五十ほどで男女共学のさほど特徴のない一般的な私立校である。

「ホント、平和な学校だよな・・・」

狼は廊下ですれ違ふ生徒達を眺めながら、ため息混じりで呟いた。

・・・不機嫌そうに。

服装は背広にネクタイ。

・・・

背広にネクタイ。

・・・片眼鏡すらしていない。

「あ、神鎌先生、おはようございます」

「おう」

「神鎌先生、あとで質問いいですか？」

「おう」

「・・・金髪が異様だが、見事な先生っぷりだった。

「何で俺が・・・」

もう泣きそうだった。

狼は零那の提案により、偽造した教員免許で雛菊高等学校に教員として潜入していた。

狼は当初、この提案をかなり嫌がっていたが、他にいい案がないので結局それを採用せざるを得なかった。

あれから一週間。

予定では明日、七不思議の最後が起きる。

その後、本当の呪いが発動される。

親友を殺された恨みで修羅と化した男が掛ける呪い。

人を呪わば、穴二つ掘れ。

昔、誰かの言った言葉が不意に浮かんだ。

「ったく、俺は杜堵じゃねーっての。呪いは専門外だ」

狼は憎々しげに呟きながら廊下を進む。

あの言葉は、確か、人を呪った者はいずれ自分もその呪いの報いを受けるという意味だったはずだ。

うる覚えでよく覚えていないが。

「こんにちは。神鎌先生」

狼は教室の扉を開けようとした手を止め、振り返る。

茶色く染めた髪に両耳にはシルバーのピアス。

他にはさりとて特徴のない生徒だった。

「おう。梨木」

狼は梨木に軽く挨拶をして教室に入る。

あいつが、犯人。
あいつが、首謀者。

名探偵も名刑事も、

トリックも謎解きもない。

小説にもならないし、なったとしても売れそうにない事件だった。
だが。

だけど。

「どうも変なんだよな」

狼は頭を掻きながらぼやく。

授業など、そっちのけだ。

何、心配はない。

今日は教諭から渡されたテストの返却だけだ。

上の空でもやっていける。

テストの模範解答を配り、黒板に説明と共に詳しい解説を書いていく。

国語担当でよかった。

狼はしみじみと思った。

漢文と古文は師匠に嫌になるほど叩き込まれていたもので、何の支障もなく対応できる。
個人的な趣味で徒然草なら、ある程度暗唱さえ出来る。

何故か師匠が教えてくれなかったので、この竹取物語はまったく知らないが。

「平均点は六十五。それ以下は来週、課題と再テストだそうだ」

狼は言いながら、黒板に再テストの日程を書き込んだ。

と、同時にチャイムが鳴る。

「じゃあ、今日はここまで。また明日な」

狼は軽く手を挙げると、チョークケースとプリント類を脇に抱え、教室を後にする。

失業したら、教員免許取って本当に教師になるのかな・・・

何だか、これが自分の天職のように感じてきてしまった。

日の当たる明るい校舎。

無邪気に笑い合う生徒達。

とても夜の世界の住人としては眩しすぎる空間だった。

そんな世界で暮らせたら

・・・病んでるな、俺。

途端、携帯のバイブレーションが作動する。

狼は自分の後ろポケットからプライベート式の携帯を取りだし、片手で操作する。

亜美からのメールだった。

簡潔に、

『屋上で待ってます』

と、だけ書かれている。

「はいはい。そろそろ本業に戻るとしますかね」

狼はポケットに携帯をしまうと、体の向きを反転させて屋上への階段へと向かった。

もうすぐ六月だというのに、外の風は冷たい。

冷たい風に長い黒髪をなびかせ、亜美は一人屋上で佇んでいた。

「よう」

狼は亜美に近づき、軽く手を挙げた。

「すっかり、先生ですね」

亜美ははにかんだ笑みを浮かべ、狼に言う。

「まあな。転職すんなら、教師が役者になるつか考えてるくらいだ」

狼は笑ってそれに答える。

「狼さんは……どう思いますか？この学校」

「あん？」

「この学校……素敵だと思いますか？」

亜美は手すりに右手を置き、左手で髪を掻き上げる。

「……そうだな。表面的にはいいところだと思うぜ。だけど、裏側までいいとは限らない。どんな理想郷でも、悪いことの二つや二つ、必ずあるからな。だけど、気になったのはアレだな。普通すぎる。人が一人死んで、謎の『呪い』が横行してるってのに平気な顔だ。もつと怖がっていると思っただけによ……で、お前はどうかんだ？この学校好きか？」

「……わたしは……嫌いです」

「自殺があったり、級友がカツアゲされたりしたからか？」

「それだけじゃ……。ただ、この閉鎖された空間ってのが嫌なんです。監獄みたいで」

「監獄……ねえ。確かに当たってるな」

狼は風で乱れる髪を手櫛で後ろに掻き上げる。

「……なあ、詳しく七不思議ってのを話してくれよ。正直、あの悪戯だけじゃよく分からん」

「いいですよ」

亜美は手すりにもたれ掛かるような姿勢になり、話し始めた。

「一つめはある日、階段が血塗れになっている。その階段は昔、その階段で大怪我を負って死亡した生徒の呪いだという。二つめは理科室のホルマリン漬けの力エルが突然動き出す。三つめは保健室の呪いのベッド。ここで寝ると二度と生きて保健室を出ることが出来ない。四つめは校庭の首無し馬。朝早く登校すると校庭の血塗れの歪めの跡を目撃することが出来る。それだけなら何も影響はないが、首無し馬を見た者は三日以内に死ぬという。五つめは殺人像。殺人鬼の霊が校庭にある像に乗り移り、夜な夜な殺戮を繰り返すという。六つめは呪いの教室。空き教室がある日、血塗れになっていて、その教室に入った者は五日後に死ぬという。そこは昔、生徒が集団で自殺した場所だったという。そして最後。これが呪いの最後です。いいですか？話しても」

「気にすんなよ。それを知らないで、仕掛を仕掛けることすら出来ない」

「そうですね。じゃあ、七つめ。七つめは体育館に住まう怪物。体育館に食い散らか

されたような人間の死体が散らかっている。そこには昔から魔物が住んでおり、そいつが生け贄を求め、体育館を夜な夜な彷徨っているという」

「……なるほど。食い散らかされた死体が……。打って付けだな。復讐には」

「……はい」

亜美はうつむき声のトーンを少し下げた。

「正直、どうなるか分かんねえぜ。説得出来ないかもしれない。生半可な憎悪じゃ、復讐なんて考えないからな。最悪、隠蔽工作だけになるかもしれない。それでもいいか？」

「……構いません。最悪、これを『呪い』として解決してくれればそれでいいです。彼が……罪にならなければそれで……」

「……つたく。羨ましい奴だよ、梨木の奴はさ。こんな可愛い子に心配してもらってさ」

「狼さんも零那さんがいるじゃないですか」

「あ？ ああ。あいつはそんなじゃねえんだ。相棒とかパートナーとかそんな感じ。俺はどっかの変態刑事と違ってロリコンじゃないからな」

「変態刑事？」

「ああ。気にすんな。知り合いだよ。正確に言うと奴は警部補なんだが」

狼は頭を掻きながら、苦笑いを浮かべた。

「……狼さんは色んな不思議なこと経験しているんですね？」

「ああ。まあな」

「超能力とか、幽霊とかも見たことあるんですか？」

「ないな」

狼はあつさりと否定した。

「どっちも、見たことはない。不思議な事件は沢山見てきたが、そついうのとは今の所お目にかかったことはないな」

「つまらないですね」

「そつか？ 俺はなかなか楽しいぞ。この仕事」

「どうしてです？」

「君みたいに可愛い子が依頼に来てくれるからさ」

狼はぼんと亜美の頭に手を置き、そのままくると体を反転させ、下の階へと続く階段へと歩き出す。

「さて、休み時間は終わりだ。午後の授業、サボンなよ」

狼は手をひらひらと振り、階段を軽快なステップで下っていった。

「むう」

零那はパソコンのモニターを睨めつけながら、眉をひそめる。

「おつかしいな。何でも違うんだろ」

ぶつぶつ呟き、モニターに目を向けたまま、カップ麺の容器を手に取る。

まだ三分経っていないが、気にしない。
それに、通は二分五十秒で食べるものなのだ。

勝手な理論を構築し、零那はカップ麺の蓋を引つpegす。

「ハズレ・・・か」

欲しかったんだけどな、ラーメンタイマー。

憎たらしいことに、この蓋は蒸気で一定時間暖めなければ
なれば 当たりはずれが分からない仕組みになっている。
つまり、カップ麺を食べ

零那は『ハズレ』とでかでかと書かれた蓋を恨めしそうに見つめ、そのまま屑籠へ放り
込んだ。

割り箸を口にくわえ、小気味よい音と共に箸を二つに割る。

軽く麺をかき回し、ずるずると麺をすする。

「しかし、なんでみんな気付かないのかな？」

麺をあらかた食べ終わった容器をパソコンの隣に置き、マウスを操作する。

「催眠術
まさかっ!？」

零那は笑う。

邪悪に、

愉快に、

嗤う。

「くくくく。こりゃあ、思わぬ所で面白いことになりそうね、狼」

零那は笑いながら、自分の携帯を操作し始めた。

放課後。

生徒は校庭では部活動に勤しみ、文化系の部活の人間は自分の部室へと急ぐ。

何気ない日常。

だが、それが何よりも異常だった。

「なんか、安っぽい学園ドラマ見せられている気分だ」

狼は廊下ですれ違う生徒達を眺めながら、小さな声で呟く。

とにかく、生徒が礼儀正しい。

こちらが挨拶する前に、ちゃんと挨拶をしてくれる。

一週間前に来たこの怪しげな教師を決して怪しんだりしない。

それはこの同僚の教師もそうだった。

いくら、教員免許を偽造して色々裏工作して潜入したと言っても、この時季外れの採用
に一つぐらい疑問に感じてもいいだろう。

なのに、それが無い。

まるで、昔から自分がこで勤めていたかのように接してくれる。

おかしい。

（しかし、結果が張つてあるような風じゃないんだよね・・・）

そういうチェックはここに最初に来たときにしている。

この校舎に魔術的作用はどこにもない。
おかしいのはそれだけではない。

例のイジメ事件。

遺書のない自殺。

「なんか詐欺にあつたみてえだ」

詐欺。

まさしくそんな言葉が似合う。

質の悪い冗談で塗り固められたような不可思議な事件。

答えは出てる。

犯人は分かっている。

だけど、それは上辺だけ。

真実はわからない。

動機もわからない。

「ま、俺、探偵じゃねえしな」

真実を探り当てるのは探偵にでもまかせておけばいい。

動機など、頭の悪い週刊誌の記者にでも書かせておけばいい。

今回こちらは、あくまでも真実を葬り去るのが仕事だ。

それ以外は関係ない。

途端、携帯のバイブレーションが作動した。

零那からのメールだった。

文面を読み、ニヤリと笑う。

「あいつも、気付いていたか」

狼はすぐさま携帯を操作し、零那に電話する。

「あ、零那。今夜の仕掛、手伝ってくれ。あと、アレ持ってきてくれる？」

3

月明かりが、カーテンを閉め忘れた体育館の窓から縫うように差し込んでくる。
その柔らかな月明かりをスポットライトのように浴び、一人の男が佇んでいた。
右手には鉈。

左手にはノコギリ。

目は、ヒトのそれではなかった。

鬼の目。

復讐者のぎらついた目。

かすかに漏れる荒い吐息が、体育館に不気味に反響する。

男は笑っていないかった。

男は泣いていなかった。

ただただ、怒りの形相でこの体育館の中心を静かに見つめていた。

あと、数分もすれば奴らが来る。

何も知らず、呑気にやって来る。

彼が死んだとき、緊急学年集会が開かれた。
そして、校長は重苦しい口調で彼の訃報を告げた。
その時、奴らは欠伸あくびをしていた。
欠伸。

気怠そうに、つまらなそうに、欠伸をしながら聞いていた。

自分には関係ない

そんな風な感じだった。

一人の人間を死に追いやって、

一人の人間の人生をぶち壊して、

一人の人間の親友を二度と会えなくして、

それで、その態度。

・・・・・・殺してやる。

そう思った。

ただ殺すだけじゃない。

この世で一番凄惨な死を与えてやる。

化け物に、喰われる。

『呪い』の供物として、捧げられる。

奴らの死体を見て、この学校の連中も気付くだろう。

この七不思議が、本当の呪いだったということ。

今までののはただの趣味の悪い悪戯としか見ていなかった連中も、これが銚子 旭の呪い
だと気付くだろう。

そして、彼が苦しんでいるときに何もしてやらなかった自分達を悔いるだろう。

その為の、呪い。

その為の、殺人。

その為の、復讐

「やめとけよ」

声がする。

バスケットボールを弾ませる音と共に、

体育館のステージから。

「くだらねえことすんなよ。それに奴らはもう来ない。さっき電話しておいたからな」

声の主は再び、言葉を紡ぐ。

「神鎌・・・先生・・・」

男は 否、梨木 薫はその瞳をステージへと向けた。

「やめろつて。そんな物騒なモン、捨てちまえよ」

声の主 神鎌 狼はなおもバスケットボールを弾ませている。

「・・・体育館はさ、こうやって楽しむところだろ？」

そして、バスケットボールをゴールへと放つ。

綺麗に奇跡を描き、バスケットボールはゴールへと、すんと入った。

「ナイスシュート」

狼は呟き、そこで初めて梨木と目を合わせた。

「おいおい、どーして俺が自分が凶行に及ぶことを知っているんだ？　なんて考えるなよ」

狼はおどけたように、梨木に語る。

「俺はさ、ある美少女に言われてお前の凶行を止めに来た正義の使者なんだ。本物の教師じゃねえ」

「正義の使者・・・だと？」

「いや、厳密には違うな。探偵だ。そう思ってくれ。説明するのめんどいから」

狼は言うや、すんとステージを飛び降りる。

「これで三回止めた。説得は充分だ」

「は？」

梨木の手からノコギリが滑り落ちる。

「いやさ、さつきから言ってただろ『やめろ』って。しかも三回も。これで俺の仕事のうち、半分は片づいた」

「あんた・・・何言っているんだ？」

梨木は困惑した表情で狼に問う。

「その美少女に言われたんだよ。『彼を説得して、この事件を七不思議として解決してください』とな。で、今説得し終わった。だから俺の仕事の半分は片づいた」

「説得って、そういうもんじゃねえだろ！」

「じゃあ、どんなものなんだ？」

「俺が、奴らを殺さないようになんか諭したり、そういうのが説得ってものだろう」

「ん？　ああ。諭されたかったのか？　じゃあ、言い方を変えよう。殺しはいけないことですよめなさい。これでどうだ？　満足か？」

「あんた・・・俺をおちよくってるのか？」

「ああ」

「ざっけんじゃねええ!!」

梨木は怒りにまかせ、鉈を振るう。

狼は余裕の表情を浮かべ、その一撃を避けた。

「ぶっ殺してやるウツ！　どうせ、三人も四人も殺すには代わりねえ!!」

「一人殺すのと、二人殺すのは違うし、三人殺すのと、四人殺すことも違いえよ」

狼は素早く梨木の懐に入り込み、鉈を払い除けた。

重く鈍い音が、体育館に反響する。

「いいじゃん復讐なんて。どーでもいいことに力を浪費すんなよ、腹が減る」

「アンタに、何が分かる!!　小学校からずっと一緒だった親友が殺されたんだぞ!!　それなのに学校の連中も、自殺に追いやった奴も、教師すらも無関心!!　このままでは、旭はいつか忘れられていく!!」

「・・・だから、永遠に忘れられないように、銚子　旭を呪い

としたのか？」

狼の問いに、梨木はこくりと頷く。

「なあ」

狼は静かに梨木に問う。

「お前はいいのか？ 親友の、お前はいいのか？ 銚子 旭が呪いとして一生この学校に語り継がれて。恐怖の対象として、畏怖を込めて、銚子 旭の名が紡がれても。お前は平気なのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

梨木は頭を垂れたまま、何も言わない。

「いいじゃねえか。お前が忘れなきや。それでいいだろ？ 月並みなこと言っけどよ、

銚子 旭はお前に復讐してもらうことなんて望んでいないぜ。奴が、本当にお前の親友ならな」

「だけど・・・・・・・・。自殺に迫いやった奴が、のうのと生きているのは俺は許せない!!」

「だろうな。それはそうだろう。じゃあ、正々堂々ぶん殴れ。全治何ヶ月かの怪我を奴らに負わせてやれ。お前に殺してくれと頼み込むような深手を負わせる。でも、三対一じゃ絶対負けるだろうから、やるときや、俺が加勢してやる」

狼は懷から名刺を一枚取り出し、梨木へと差し出した。

「魔術師の巣は不思議な事件から近所の猫探しまで、なんでも引き受けるからよ」
気がつけば、梨木は泣いていた。

今までずっと胸に溜め込んだものを吐き出すように嗚咽しながら泣く。

「希望だけを見つめる。絶望を見つめ続けることなら、誰にでも出来る」

狼はそれだけ言つと、転がっていったバスケットボールを拾いに行った。

「で、ここまでなら、めでたしめでたし良い話だな、で終わるんだが」

梨木が帰った後、ボリボリと頭を掻きながら狼は呟いた。

「残念ながら、そうはいかないんだよ。めんどくせえ」

狼は軽く嘆息する。

「なあ、アンタもそう思うだろ」

そして、近くににいる人影に問う。

「さて、本題に入ろうか。栗木 亜美ちゃん」

少女は、くすりと蠱惑的に笑った。

「いつから気付いていたんですか？」

「最初から・・・・・・・・そう言えばカッコイイだろ？名探偵みたいで」

「そうですね」

亜美は明るく笑う。

それはどこか毒を含んだような、夜の女神^{ヘカテ}の笑み。

「変だと思ったんだよな、この学校の俺に対する態度。みんな昔から俺のことを知っているかのような変な態度。あれ、お前がやつたんだろ？」

「はい」

「もちろん、梨木 薫に銚子 旭が級友達によつて自殺に追い込まれたように思わせたいのも、お前だろ？」

「はい」

「そして、銚子 旭を自殺に追い込んだのもお前だろ？」

「はい」

「で、お前の目的は何なんだ？」

「七不思議をこの学校で体現させることです」

亜美は笑みを崩さず、狼に告げる。

「……まったく。遺書の無いのは当たり前だよ。本人に自殺する気がないんだから。」

「……邪眼か。初めて目にするが凄い威力だ」

「ふふふ。いいでしょ？ でも、酷いですよ、狼さん。嘔吐しましたね。幽霊とか超能力とか見たことないって言っていたじゃないですか」

少し頬を膨らませ、亜美は狼に抗議する。

「俺は嘔吐きなんだ。よく覚えておけよ。だけど、あながち嘔吐は吐いていないぜ、今回は」

狼は背広を脱ぎ捨て、ネクタイを外し、ポケットから取り出した片眼鏡を右目につける。

「やっぱ、こうじゃなきゃ締まりがない」

狼は邪悪に笑い、いつの間にか手に握られたモノを亜美へと向ける。

それは鈍い光沢を放ち黒光りする、銃。

C z 7 5

そう名付けられた、チエコの名銃である。

「俺はさ、幽霊も超能力も見たことはないが、視^ミたことはあるんだよ」

言いながら、狼はしっかりと照準を定めたまま微動だにしない。

「おとなしく俺に能力封印されるか、それとも俺に戮^{リク}られるか、好きな方を選べ」

「随分と、怖い二択ですね。まるでどつかの大国みたい」

銃口を突き付けられてなお、亜美は余裕の表情を崩さない。

「お前が言つなよ邪眼遣い。いや、言^{コト}霊遣いと言^{コト}うべきかな」

狼は軽口を叩くも、目はまったく笑っていないかった。

「眼の強制暗示の能力に拍車を掛ける話術。並大抵の人間が一昼夜で習得できるものじゃねえぞ」

「それはあなたも同じです。殺気を殺して普段の生活を営んでいる。とても普通の人間が出来ることはありません」

銃口を眺めながら、亜美は言う。

「あなたからは血の臭いがします」

「知ってるよ」

「あなたはわたしより多くの人間を殺してきていますね」
「分かってるよ」

狼はつまらなげに言う。

「けだもの
獣」

「うるせえ、化け物」

言うや、狼は銃を放つ。

弾丸が、一直線に弾道を描き、亜美へ襲いかかる。

「甘いです」

刹那、亜美の体が消える。

「クツ、認識操作か!？」

自分を、相手に認識させぬことで、己を存在しないと見せかける。

彼女の眼を見た瞬間から、彼女の術中にはまっていた。

「本来ならば、あなたをわたしの能力で自殺に追い込めればよかったのですが、アレは色々と時間と手間暇がかかりますので。この辺りで失礼させていただきます」

声だけが、体育館に不気味に響く。

「……………お前も甘いぜ」

狼は邪悪に笑いながら、言葉を紡ぐ。

「まさか俺が、これを予想していなかったとも思うのか？」

「!?」

「お前がここに来たとき、この体育館全体に結界を張らせてもらった。外部はお前の認識操作と同じで、内部は空間遮断。故にお前はここから出られないし、外部からこの異常を知る術はない。最悪、この場所がなくなったとしても気付く奴なんていないだろうよ」

狼は嗤いながら、銃を構える。

「で、なんで七不思議なんかを体現するんだ？ オカルトなんて最近流行んないぜ」

「さあ？ 強いて言うなれば、なんとなく、ですかね。動機なんてありません。ただの気まぐれ、暇つぶしです」

「なんとなくて、人殺して、なんとなくて、何の罪のない奴の心を踏みにじる。ムカつくぜ、マジでな」

「人殺しに言われたくありません、そういうの」

「そうかい。どーでもいいけどよ、お前あのままアイツに不良連中を殺させる気なかったろ？ いくら体育館で殺人があっても、それはただの殺人であって異常な、それこそ呪いではない。これは俺の憶測だが、お前、梨木も殺す気だったろ？ いや、違うな。殺すというよりかは喰い合わせる、と言った方が正しいか。あの精神状態なら、簡単にお前の術中に引っかかる。たしか、七不思議の最後はこの体育館に住まう怪物に喰われるだったよな？ 発見者はそれこそ驚くだろうな。獣のように喰い合っている幾つもの死体。近くには銚子 旭の名前。それこそ呪いだ。それが、お前の言う七不思議の体現。違うかい？」

「すごいですね。正解です。シャーロック・ホームズも脱帽な推理力です」

「棒読みされても嬉しくねえよ」

狼は嘆息混じりに呟いた。

「さて、お前これからどうするんだ？ その状態じゃ、攻撃できねえだろ？ しかもこ

こから逃げる事も出来ない。完全に停滞だ」

「そうでしょうか？ 攻撃なら出来ますよ。あなたにわたしが見えなくとも、わたしからあなたは丸見えです。ちょうど、鉦もあるし打って付けです」

「そうかな」

狼は邪悪に嗤う。

「やってみろよ、小娘」

「では お言葉に甘えさせていただきます」

鉦の、空を切る音がする。

不気味に、空間を切り裂くような、音

「視つけたぜ」

狼はその音を聞き逃さず、その方向へと銃を放つ。

「デメエの姿をな」

言つや、狼は鉦を握った右手をがっしりと掴む。

「なっ!？」

亜美は驚きつつも、自分の眼差しに神経を集中させる。
強制暗示と認識操作の力を発動させる。

が、眼が動かない。

金縛りにでもあつたようにびくともしない。

これでは能力を発動させることが出来ない。

何故？

何故。何故。何故。何故。何故。何故。

「 教えてやろうか？ 」

そう言つ、狼の瞳は先ほどの眼差しではなかった。

紅い、血のように紅い瞳。

その不気味に光る双眸が、真つ直ぐに亜美の瞳を捕らえて放さない。

「凍結眼。」

視たモノを停める力を宿す魔眼だ。お前の眼の能力は俺のこの眼のおかげで
発動不能だ。残念だったな」

邪悪に嗤い、狼は銃口を亜美の額へと向ける。

「所詮、半端者な半端者なんだよ」

乾いた、あつけない銃声と共に、亜美の額に銃弾が叩き込まれる。

不思議と出血はない。

その反動で亜美は体勢を崩す。

そして、そのままどさりと体育館の床へと倒れ伏した。

「封印完了」

言つや、狼は銃を腰のベルトに挟み、

「さて、帰って飯にするか」

先ほど放った背広を肩に引っかけ、体育館を後にした。

「どうせ暴くなら、依頼料もらってからにしないよ。また赤字じゃない」

ブツブツ文句を言いながら、零那はノートパソコンに数値を打ち込む。

「そう言うお前だって、結界の準備とか色々ノってたじゃないか。お互い様だよ」

狼はたった今出来上がったカップ麺をすすりながら、言う。

「それに、半覚ウィスダム・ウィザード醒者の能力封印による報酬が異界から払われる。心配いらねえよ」

狼は麺を食べ終わり、スープを飲み干す。

「ねえ、マジな話。狼はいつから気付いていたの？ 彼女が怪しいって」

「多分、お前と一緒にだよ。生徒の詳細資料を学校で見たとさだ。こつちに持ってきた資料は自分で偽造したやつだったらしいが、流石に学校のは偽造できなかったんだろっな」

食べ終わったカップ麺の容器を手首のスナップをきかせ、屑籠に放り込んだ。

「わたしもね、ハッキングして驚いたよ。まさか、栗本 亜美が一年前に自殺した生徒だったなんてね」

「ああ、そうだな。おそらく今回の銚子 旭と同じ手を使って自殺に追い込み、その後自分が認識操作で栗本 亜美に成り代わったんだろ」

「結局、彼女、名前のない誰かさんは一体何がしたかったんだろっな」

「さあね。今となつては誰も分からないさ」

狼は朝刊の三面記事をひらひらさせる。

そこには、かつて栗木 亜美を名乗っていた少女の実名と詳細。首吊り自殺だったらしい。

雛菊高等学校からさほど離れていない山林で、首を吊っていた。

彼女はこの学校の生徒ではなく、また進学もしていなかった。

二年ほど前から行方不明で搜索願も出たという。

現場には遺書など、何も残されていなかった。

遺書のない自殺。

「なんで、遺書残さなかったんだろっな」

「さあ。よほど、この世に未練がなかったのか、それとも」

「それとも？」

「それとも、既に彼女はこのセカイに存在していなかったモノだったのかもしれないな」

「何それ？」

「いや、こつちの話」

狼は独り言のように呟くと、新聞を折りたたみ、テーブルに放った。

彼女がどういう人生を歩み、何でこのような馬鹿げたことをやらかそうと思ったのか、知る由もないし、知りたくもない。

結局、何も分からないままだ。

動機も。

真実も。

「これは悪い夢。七不思議の呪いだったんだよ、やつぱ」

「？・・・ねえ、どうでもいいけどさ、さっきのカップ麺、白露のくじ付きのカップ

麺じゃなかった？」

「ん？ ああそうだけど」

「蓋、どこにやった？」

「さあ、知らねえ。屑籠の中にあるんじゃねえか」

「ったく、ちゃんと捨てないでわたしに渡しなさいよね」

零那はガサゴソと屑籠の中身を漁る。

「見つかったか？」

「あ」

「ん？ 何だ？」

「ラーメンタイマー、当たった」

言いながら、零那はカップ麺の『当たり』と書かれた蓋をひらひらさせる。

「よかったじゃねえか。だったらもう少し素直に喜べよ」

「・・・締め切り、昨日だった」

「あらら」

「一、哀しい七不思議ノ了」